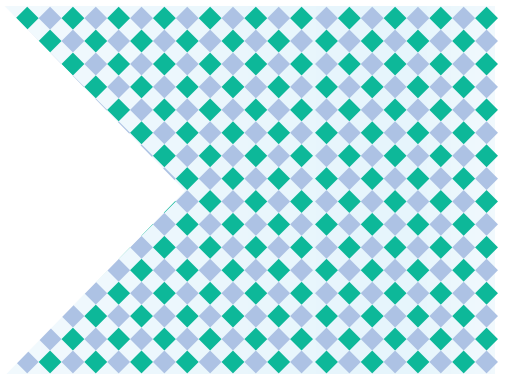


GPN Column

グリーン購入ネットワーク コラム Vol.10



インパクト投資を巡る潮流と今後への期待 林 寿和

(ニッセイアセットマネジメント株式会社 ESG推進部 チーフ・アナリスト)

1. インパクト投資の生い立ちとその概要

インパクト投資をめぐる議論がいよいよ国内でも盛り上がってきました。

2020年には、金融庁とGSG国内諮問委員会の共催で「インパクト投資に関する勉強会」が立ち上がったほか、環境省でも「ポジティブインパクトファイナンスタスクフォース」が設置され、同年7月には「インパクトファイナンスの基本的考え方」が、2021年3月には「グリーンから始めるインパクト評価ガイド」がそれぞれ公表されました（なお、筆者もこれらの会議に委員として参画しています）。

もともと「インパクト投資」という言葉は、2007年に米国のロックフェラー財団によって生み出されたとされ、すでに10年以上の歴史があります。いわゆるESG投資との違いは、投資家自らがインパクトを生み出そうという意図をもって投資活動を行う点、そして、意図したインパクトあるいは意図せず生じたインパクトがどの程度だったのかを測定して報告する、という2点にあると考えられています。他方、ESG投資と共通している点もあります。それは、インパクト投資は「寄付」でなく、あくまで「投資」だという点、すなわち投資を通じて金銭的なリターン獲得を目指しているという点です（ただし、金銭的なリターンの要求水準はESG投資のそれと異なる可能性があります）。

ここで、インパクトという言葉の概念についても確認しておきたいと思います。私たちは日常的に「強い影響」や「衝撃」といった意味でインパクトという言葉を用いますが、インパクト投資において投資家が目指すインパクトとは、「ア

ウトプットを通じて生じるアウトカムをより改善し高めること」を指しています（言葉の厳密な定義は組織によっても異なりますが、概ねこのような意味だと筆者は理解しています）。

例えば、ある製薬企業が開発し供給したワクチンの数は、当該企業にとってのアウトプットです。一方、供給されたワクチンによって、実際に人々が病気にかかるリスクを軽減できたか否かがアウトカムです。アウトカムの概念は経済学でいうところの外部性の概念に近く、ワクチンの例についていえば、それを接種した人だけでなく周囲の人々の感染リスクも軽減することができる、という点で正の外部性を有しています。投資家は、製薬企業への投資を通じてワクチンの開発資金を提供する、あるいはさまざまな経営上のアドバイスを通じてワクチンの供給量を増やすことができれば、アウトカムを高めることが期待されます。これこそがインパクト投資家が追求するインパクトの一例といえます。

さて、このインパクト投資ですが、近年その担い手が多様化してきています。もともとは開発金融機関や慈善団体が主な担い手とされてきましたが、最近では伝統的な資産運用会社や保険会社なども手掛けるようになってきており、市場が拡大してきています。

2. なぜ今インパクト投資が注目を集めているのか？

ここからは、インパクト投資が近年注目を集めている背景を一つ一つ紐解いていきたいと思います。

[続きはGPN会員専用ページからご覧いただけます。](#)